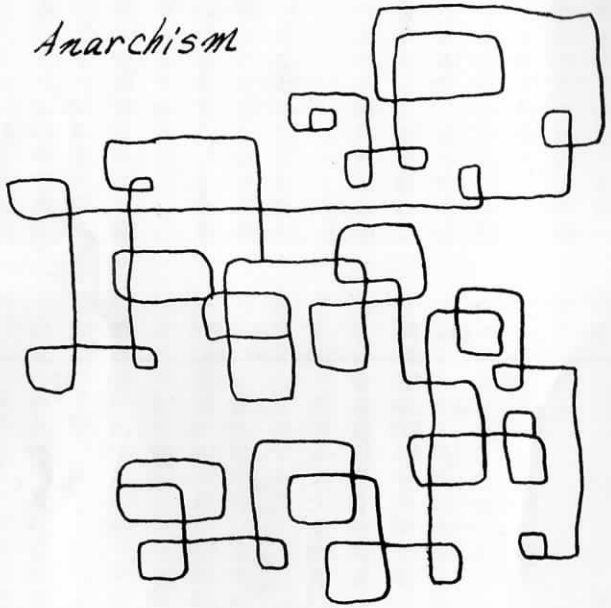
毎月一回15日発行昭和51年８月15日発行・第79号(昭和45年９月４日第三種郵便物認可)

リベルテール

8 月号



Libertaire VoL, Ⅶ. No. 9

無　政　府　主　義　誌

昭和45年9月4日第3種郵便物認可
昭和51年8月15日発行第79号
リベルテール　定価一〇〇円(郵便料共)

■リベルテール　Le Libertaire
■**1976年８月15日 発行**　VoL,　Ⅵ, No. 9
■編集兼発行者　三浦精一
■発行所　東京都練馬区大泉学園町２１９０
萩原晋太郎方　リベルテールの会

毎月１回15日発行 振替 東京１３３８３０番 三浦宛

目次

目　次

巻頭言――――――1
バクーニンと現代革命(4)――――2
江西一三自伝について――――6
シカゴを訪ねて――――11
胃潰瘍入院始末――――13
野　火――――17

巻頭言 ― くっつくということ

山本二夫

連合の理論とは何かということを考えてみる。すると僕はどうしても否定的になってしまうのである。ただ一つ、連合への欲求とは何なのか、ということが連合の理論のために残された橋のように思えるのである。

連合の理論ではどのようにくっつくかということが問題となるけれど技術的な問題でやれああだ、こうだではなく、何でくっつくのか、何がくっつくことを要求しているのか、が僕には連合するために互いに語られる言葉だと思うのである。

どうくっつくかという問題はくっつくということをその内念で煩悶した人には現下の問題となってこないと思う。くっつき方があまりにひどければ放棄するであろうことは最初からわかっていることであろうから。

何でくっつくのかということが最大の問題なのだと思うのである。所で、昨今、人々はなぜくっつかないのか、考えるにくっつくということを欲求していないのである。くっつくということはくっつくことによって生じる制約を受けいれることが必然であり、自己犠牲を必要としているのだ。昨今、人々は得体のしれないことに自己犠牲を強いることや制約を受け入れる気は希薄なのである。なんでくっつくのかということを革命的潮流ともいうべき潮流は革命のためにと簡単に答えられた。革命のために必要な位の力がくっつき、革命のためにくっつくために生じる制約を受け入れ、革命のために自己犠牲を強いた。

このデンでいくと今や革命という欲求は消滅したか、くっつくための理由にならなくなったというべきか。

よく人々は目的のために手段を選ばないのは誤まりだ、目的のためにこそ手段を選ばなくてはならない、という。してみると革命のためにといって無原則にくっつくことが手段の放棄のようにみえ、くっつくためにも原則性が要求されるのであろう。

しかし僕には昨今、人々がくっつかないのはもっと個別的な原因があるように思えるのである。革命を必要としない。まともにくっつく気を起させる人がいない。政治結社の時代は過ぎた、お金の無駄。くっつくのはわずらわしい。等、等、

僕はいいたい、それではこの雑誌は必要ないではないか。この雑誌はアナキズムの雑誌ではなくアナキズムが好きな人の趣味の雑誌なのか。おもしろいだけの雑誌なのか。違うはずだ、もっと違う目的があるはずではないか、どうして目的を放棄することができようか。僕達が連合しているのはその位の理由はあると思うのである。

バクーニンと現代革命（4）

ポール・アヴリッチ

しかし、バクーニンは、革命的独裁を攻撃したにもかかわらず、彼自身の陰謀家の秘密結社を創立しようと決意したが、そのメンバーは「厳格なヒエラルヒーと無条件の服従に従わさせられる」であろう。そのうえ、この秘密組織は、革命がどんな「公認の独裁」の樹立の先鞭をつけるために遂行された後ですら、そっくり残存しているであろう。こうして、バクーニンは彼があれほど激しく非難したその罪を犯したのである。彼自身は、一人の革命的な独裁者への絶対の服従によって結合させられているある秘密の、緊密に結びついた革命党という理念の主要な創始者の一人であったが、彼はある一点において、この党をイエズス会の教理になぞらえていた。彼は手段と目標との間の密接な関連を認識していたとはいえ、彼が革命を起すために用いられる方法が革命後の社会の性格に影響を及ぼすにちがいないことを知っていたとはいえ、それにもかかわらず、彼みずからのリバタリアン的な諸原則とまごうことなく矛盾している手段に訴えていた。彼の目標は自由に向かっていたが、彼の手段――秘密の革命党――は全体主義的な独裁に向かっていた。

要するに、バクーニンは次のようなある古典的なジレンマにおちいっていたのだ。彼は、効果的な革命組織の欠如が必然的な失敗を運命づけているが、彼の選択した手段は自分が熱望していた目標を不可避的に堕落させる、ことを理解していた。

それどころか、革命的モラルの問題について、バクーニンは、目標は手段を正当化する、と実際のところ説いていたのである。ちょうど百年前にネチャーエフと執筆した『革命家の教理問答』では革命家は現存秩序の破壊をひき起すいかなる犯罪、いかなる変節、いかなる卑劣行為をも犯さねばならない完全な非道徳家として述べられている。革命家は「今日の社会道徳をそのあらゆる形態において軽蔑し、憎悪する。彼は革命の勝利に寄与するものをすべて道徳とみなす。……友情、愛情、感謝、名誉というすべてのソフトな、活力を失わせる感情は革命の大義のために冷酷な情熱によって心のなかで圧殺されねばならない。……日夜、彼は一つの思考、一つの目的――苛借なき破壊――をもたねばならない」とバクーニンとネチャーエフは書いた。エルドリッジ・クリーバーは、『氷の上の魂』において、彼はバクーニンとネチャーエフの『教理問答』と「恋におちいり」、それを革命のバイブルとして「私が接するようになったすべての

ものとの交際において無慈悲という戦術」を採用することによって日常生活にその諸原則をとりいれた、と述べている。（『教理問答』は、上述したように、バークレーのクリーバーのブラック・パンサーの組織によって最近パンフレットとして刊行された）。

ここでもやはり、「一時的な」革命独裁と同じく革命家の秘密組織への信仰においても、バクーニンはレーニンの直接的な祖先であった。このおかげで、アナキストたちが一九一七年にケレンスキー政府を打倒するボルシェヴィキのライヴァルと同盟することがいかに容易であったかということがヨリたやすく理解できる。事実、十月革命後にあるアナキストの指導者は「プロレタリアートの独裁についてのアナキスト理論」をつくり出そうとさえしたものである。二〇年後のスペインにおけるように、アナキストが民主主義のひよわな胎児を破壊するのに力を貸し、かくして自分たちを没落させる元凶となることとなった新しい専制政治の道を準備した、という事実には悲劇的な皮肉がある。なぜなら、ひとたび権力を握るやボルシェヴィキはそのリバタリアン的な盟友の弾圧へと進み、革命はバクーニンのすべての希望の反対物に転じたからである。生存しつづけることを許された少数のアナキスト・グループのなかに、「ソヴエト領域にではなく惑星間のスペースに」国家のない社会を発足させる意図をおごそかに宣言したグループがあった。このことは今アームストロングやアルドリンの興味深いいくつかの見通しを提起する！　しかしながら、大部分のアナキストにとっては、彼らの師バクーニンが五〇年以前にそのことをすべて予言していたというメランコリーななぐさめしか残っていないのだ。

だから、バクーニンの遺産とはアンビバレントなものである。けだし、バクーニン自身が矛盾した、アンビバレントな性格をもった男であるからである。農民反抗を熱望する貴族であり、他人を支配しようとする押さえがたい衝動をもったリバタリアンであり、強固な反知的な気質をもったインテリである彼は、自分の頭脳から秘密組織のすべての回路網をつくり、仲間たちに彼の意思への無際限の服従を要求していたというのに、無限定の自由を説いていた。そのうえに、ツァーへの悪名高い『告白』においては、西ヨーロッパへスラヴ主義の旗をもちこみ、無能力な議会制度を廃するようにニコライ一世にアピールすることができた。汎スラヴ主義と反知性主義、ドイツ人とユダヤ人（もちろん、マルクスはその両方であった）に対する病理学的な憎悪、暴力と革命的不道徳への狂熱、リベラリズムと改良主義の憎悪、農民とルン

ペンプロレタリアートへの信仰 ― これらすべてが後に右翼と左翼両方の権威主義的な運動へ彼を不快にも接近させることになったのであるが、これらの運動は、もし彼がその活発な興隆を見るほどに長生きしたいならば、バクーニン自身が戦慄して退いたであろう運動であった。

だが、アンビバレントであるとはいえ、彼はいぜんとして影響力ある一人の人物である。ゲルツェンはかってバクーニンを「アメリカなき、船さえもないコロンブスのような男」と呼んだものである。しかし現代の革命運動は彼にとてつもない精力、豪胆、激烈を負っている。彼のはちきれんばかりの若々しさ、中産階級の因襲に対する侮蔑、理論よりもむしろ行動の強調は今日の反抗的な青年の間にかなりのアピールを及ぼしているが、これらの青年のためにバクーニンは行動のアナキズムの、生活態度としての革命の一実例を提示している。彼の諸理念もまた現代に相応 ― おそらくかってより以上に ― しつづける。とりわけ、マルクスと比較したときにそうであるが、彼が学者としていかに欠陥があろうとも、それらは彼の革命のビジョンや意図によってもののみごとに帳消しにされている。バクーニンは、プリミティブな反抗、陰謀好きの革命党、テロリストの不道徳主義、ゲリラの蜂起主義、革命的独裁、民衆に自分たちの意志を強制し、民衆からその自由を剝奪するであろう新しい支配階級の出現の予言者であった。彼は全世界的な用辞で、国際的な規模で社会革命を説いた最初のロシヤの反逆者であった。自己決定と直接行動についての彼の定式は、彼の主な嫌悪物である中央集権化された官僚国家が彼の最も絶望的な予言を的中させつづけている間に、ますますもって魅力を発揮している。ロシヤ、スペイン、中国の諸教訓以後、社会的な解放は独裁的な手段によってよりもむしろリバタリアン的な手段によって達成されねばならないというバクーニンのメッセージは、きわだって注目されている。そのうえ、労働者管理が再び広く論じられている時代にあって、バクーニンは、おそらくプルードンさえよりも革命的サンジカリズムの予言者であり、労働組合の自由連合が「ブルジョワ世界にとって代るはずである新しい社会秩序の生気ある胚種」であろうと主張していた、ということはきちんと記憶されるべきである。

しかし、なにはともあれ、バクーニンが現代の学生やインテリに魅力的であるのは、彼のリバタリアン的な社会主義の性格が二〇世紀の破産した権威主義的な社会主義の代替的なビジョンを用意しているからである。自治的なコミューンと労働連合の地方分権社会という彼の夢

は中央集権化された、画一主義的な、虚構の世界から脱出しようとしている人々にアピールする。「私は学生である。私を閉じこめたり、骨抜きにしたり、組み込んだりするな」には明らかにバクーニン主義の風味がある。事実、学生反抗者たちは、マルクス主義者を自認しているときでさえも、ときとして精神的にはバクーニンにヨリ接近しており、バクーニンの黒旗はパークレーからパリまでキャンパスのデモンストレーションでときどきひるがえされている。彼らの自然的なるもの、自発的なるもの、非体系的なるものへの強調、簡素な生存様式の主張、官僚制と中央集権化された権威の嫌悪、すべての人間が自分の生活に影響を及ぼす決定に参加すべきであるという信念、「参加する民主主義」「今の自由」「民衆に権力を」というスローガン、コミュニティ支配、労働者管理、村落協同組合、平等の教育と収入、国家権力の拡散 ― これらすべてはバクーニンのビジョンと調和している。リバタリアン・アナキズムと権威主義的社会主義との正反対の方法を結合しているきわめて多くの若い反逆者の間のアンビバレンスさえもがバクーニン自身の革命の哲学と人格構造のなかのアンビバレンスを反映しているのだ。

最後に、若い不満分子が自己賛美的な科学の進歩への無批判の信仰を問題にしているところではどこでも、バクーニンの声がこだまする。百年前、バクーニンは、科学者と技術専門家が他人を支配するために知識を用いるであろう、いつか普通の市民は荒々しく目ざめさせられ自分たちが「野心をもった人間の新しい集団の奴隷、玩具、犠牲者」となっていたことに気づくであろう、と警告していた。こうして、バクーニンは「科学に対する、むしろ科学の支配に対する生の反抗」を説いていたのだ。だからといって彼は科学的知識の有効性を拒否したわけではない。しかし、彼はその危険性を認識していた。彼は、生命が実験室の公式に還元しえないこと、この方向での努力が最悪の形態の専制につらなるであろうことを知っていた。死ぬおよそ一年前に書かれた手紙で、彼は全世界への「邪悪の原則の進化と発展」について語り、現在「産軍複合体」と呼ばれているものについてあらかじめ警告していた。「早晩」と彼は言った、「これらの途方もない軍事国家はたがいに滅ぼし、食いあわねばなるまい。しかし、なんという見通しか!」

彼の恐れがいかに正しかったかは、現在、大量破壊という核と生物兵器の時代に評価されうる。プリミティヴな社会要素の理想化が再び流行となっているとき、大衆反抗が再び広く説かれているとき、近代技術が西欧文明

を破滅的に威嚇しているとき、明らかに、バクーニンは再評価に値する。終りに、およそ三〇年前に、偉大なアナキストの歴史家、マックス、ネットラウによってなされた評言、バクーニンの「思想は永遠に新鮮で、生きつづけるであろう」が想起されるのである。（おわり）

四回に分けて訳出したポール・アヴリッチ「バクーニンと現代革命」の原題は「バクーニンの遺産」である。これは「ルシアン・レビュー」一九七〇年四月号に初めて掲載され、今ではサム・ドルゴフ編『バクーニン・オン・アナーキー』（ニューヨーク、一九七一年）の序文とされており、全く同一かどうかは不明であるが、前者から訳出した。すべての注釈は引用文献名だけなのでこの訳文では割愛した　（坂入純二）

☆　リベルテール・サロン　☆

リベルテールの会では毎週火曜日、集まっておしゃべりをしています。誰でも参加、可。気楽にどうぞ。

場所　水道橋駅神保町方向徒歩2分、白山通り面喫茶店コージ（二九五）〇二四三

日時　毎週火曜日、夕・六時半より八時

江西一三自伝について

三浦精一

七月十七日（土）午後六時から啓衆ビルで江西ピンチャン翁を迎えての夕が開かれた。この翁（おれは翁などと言われたくないとカズミ君自身後で抗議していた）には、僕もまだ会ったことがなかったので大きな期待をもって出席した。大阪から逸見吉三君も一緒に来てくれ、在京の古い同志たちとともに江西君を中心にした会だった。白井新平君の司会、そして白井凡平君夫妻の行き届いた斡旋で会はなごやかに進んだ。

江西君は自伝にもある通り、大阪で子供の時から生活と闘かい、一九二一年に久保田鉄工所に雑役工として入り、そこで広田氏という組合購買部の人から、幸徳秋水訳のパンの略取、クロポトキンの相互扶助論、大杉栄の正義を求むる心を借りて読んで以来のアナーキストであり、労働運動一筋に生きて来た。現在は総評所属の全国一般労組大阪地方本部の執行委員でもあり組織部長でもある。

全国一般労組は中小企業を中心に組織活動を続け、現在伸びなやんでいる総評の中で、もっとも目覚ましい伸びを示しているという。繁栄を続けた日本経済の底辺で

大企業に搾取されながら、日本経済を支えて来た中小企業の、もっとも恵まれない労働条件の下に生きる労働者たちこそ、もっとも組織を必要とする人々なのである。大企業や官公労の労働貴族が大部分をしめて華やかなスケジュール闘争を展開してマスコミを賑わしている総評の中に、このような中小企業の組合があることは知らなかった。知らなかったというのは何とも申訳なかった。この日こうして白井君の所で江西君と会うまで、僕が描いて来た円周が、江西君のそれと交錯する日が無かったからである。そのことは後で触れるとして、僕が江西君を知らなかったように、江西君を知らないでいる読者諸君に、江西君を知ってもらわねばならない。この自伝を読めば一番良いのだが、それは末尾に書く発行所に註文してもらいたい。

もっとも劣悪な条件下に在る中小企業の労働組合活動を推進して行くこと、それを並大抵の苦労ではない。全国一般労働組合本部の佐野氏の話を聞いても、江西君がいる組合事務所は人も驚く汚なく見すぼらしい所だという。大きなビルを建てて豪奢な事務所で執務する貴族組合とは違うのだ。底辺にある労働者と命運を共にする組合の活動者に要求されるものは、その人間が真実に労働者の心を持ち、その心をもって労働者の「明日」に労働者とともに踏みこむことができるかどうかである。指令を出すことでなく、情勢や利害を判断しながら戦かうことである。

この自伝は戦前篇と戦後篇に分れている。戦前篇は江西君の最初の大阪時代から大戦までの時代で大震災で大杉らが殺され、戒厳令下の東京から都落ちして来た同志たちと逸見吉三君の所で会った。母の野辺の送りを済ませて高橋光吉、飯田赤三両君につれられて上京したのは一九二四年（大正一三）だった。

東京での江西君の生活は、それ自身がアナーキストの労働運動の戦斗史ともいうべきもので、僕が石川さんを訪うたのが江西君の上京の頃だった。僕は石川さんの紹介で原田理一君に会い、塩、青柳の諸君の出していた「黒戦」に関係しただけで、戦前のアナーキストの運動については、その没落過程を周辺から眺めたに過ぎず、間もなくシナに渡って終戦までの六年間を山東省の青島で過した。黒戦は黒色青年が分裂した後、塩君たちが出したもので加藤一夫や石川三四郎に支持されていた。これに対して、江西君が観念的アナーキストと呼んでいる八太舟三や岩佐作太郎に支持されていたのは「黒旗」で思想の純潔などと称していた。八太舟三はもと組合教会の牧師で、純福音派の信仰態度を持込んだものと僕は思って

いた。これは当時のマルクス・レーニン主義者がマルクス、エンゲルス、レーニンの片言隻句にもこだわって自分たちの正当性を主張していたのと全く同様に聖書の一言一句を神の言葉と信じるものであった。こうした純粋性の主張は新興宗教の教祖たちにも共通で、その排他的な独断によって人々を迷わすものである。江西君が引用した、「人民解放への行為は、何回も反覆される行為ではなくして、一生に一度しか行い得ないものである」という八太氏の言葉は、キリスト再臨の審判の日を信じるキリスト教徒のものである。正しい者の永遠の救、正しからぬ者の「永遠の刑罰」は全能の神の権力を前提するただ一回の革命だ。シオニストにもこうした信仰がありマルクス、レーニン、毛沢東、ムッソリーニ、ヒットラーもこうしたユダヤ的審判思想への教条的一致を持ち、意見の異なる者たちを反革命分子として粛正して権力を維持しようとする。思想の純粋など有るはずがないし、純正無政府主義なども存在しない。純粋も純正も比較的にしか言えないもので、何を基準にどんなものを純粋とか純正とか言おうとしたのか。山賊論にしても翻訳であり、アメリカの組合のことを、その頃総同盟系のやり方を見て書いたのだろうが、今だったら、それに「官僚化」を加えねばならないだろう。没落過程のアナーキズム運動でこんなものを取り上げたのは幸か不幸か。

産業革命の結果、労働者階級という新しい階級が発生したというマルクスの見方は正しいが、階級を労働者階級と資本家階級に限定するのは誤りで、ロシアには階級がないというのも勿論言葉の上のゴマカシだ。官僚階級、労働貴族階級、農民階級、軍人階級もあり、集団性の動物である人間社会にいろいろの階級があるのが当然である。大きく分けて支配階級と被支配階級にも分けられる。労働者階級が当面する階級として資本家階級を認識するだけのことだ。マルクスのいわゆる二大階級だけに絞って考える考え方も、八太、岩佐の階級否定も、同じ観念論でしかない。階級は社会の中に、二つだけでなく、人間の集団性に応じて沢山あるのだ。その沢山ある中で消滅させねばならない階級として、人間の偏見と私有性に根ざす資本家階級や労働階級、官僚階級、軍人階級などを挙げねばならないのだ。そうした偏見によって社会階級や官僚根性の支配階級をつくるまいとするところにアナーキストやサンジカリストの連合主義がある。

大震災後の苦難に満ちたアナーキストの運動を戦い続けた江西君は、こうした点で正しかったと評価することができる。

×

大戦後の労働運動は、戦前とは全く変った様相の下に戦われてきた。

戦後いち早く労働法がつくられて、俸給生活者も労働者の部類に入った。これは頭の良い日本の官僚によって先取りの形式で制定された。戦前はホワイトカラーとブルーカラーは別の階級と思われていた。俸給生活者組合をつくったアナーキストもいた。

官僚の頭の良さは農業協同組合法にも示される。協同組合という民衆の自発的な運動形態を法律によって支配機構の中に組み込んでしまった。

法律によって労働組合を認めるばかりか、組合規約のサンプルまで準備して簡単に組合が作れるようにもなった。そして出来た日本の組合は多く会社組合である。ホワイトカラーを含んで労働組合員の数は実に膨大なものになった。数においては多くなったが、組織されたのは大、中企業で、小、零細企業労働者の大部分は未組織のままである。こうした未組織企業は主として大、中企業の下請けでその労働者は、大企業の労働者と比較して、はるかに劣悪な条件で働いており、零細企業に至っては家内工業的で一人か二人の労働者しかいない所、それすらもいないものも多い。大、中企業に搾取される下請企業。そこで働らく労働者。零細企業に至ってはほとんど家内工業的なものが多い。華やかな日本経済の発展はこうした二重三重の搾取構造をふまえてのものである。利潤追及の知慧から出た構造で、この底辺にある労働者こそもっとも生活の防衛のために戦わねばならないのだが、戦の限界も狭く、意識的にも低いのが通例である。江西君たちの活動はこうした分野でのもので、その困難さも思いやられる。

共産党の党支配下の産別加盟を好まない中立系組合によって結成された日労会議、それが組織を拡大して全日労になったが、相沢尚夫君もずっと活動を続けていた。

極左と一線を劃して総評が結成された時、全日労もこれに参加した。参加に際して日労の代議員は「総評は、産業別組織を基本とした統一組織体として規定されているが、これでは総評は大企業、官公労中心の組織に限定されると思われる。現状では、いまだ産業別組織に結集できない多くの組合があり、特に中小零細企業労組などは、この総評規約では加入できない事になるのではないか」と質問し、「中小零細や、その他の雑産業労組は、合同労働として、規約中の特例として、加盟してもらう意向であり、その線にそって、組織化し、総評への加盟を期待している」という回答を得ている。総評での中小企業の位置というものを知ることができる。こうした中

で江西君は大阪中小企業労連を推進したのであり、この中小企業労連の後に全国一般労連の大阪地連に合同統一され、さらに全国一般大阪地方本部となっている。

江西君はこの間に経験した幾つかの争議について書いているが、いずれも興味深く、われわれも学ぶべき経験が書かれている。

×

戦前とは大きく変った日本の状勢に直面して、労働運動の形態も変って来た。「一身を運動にていすることこそ、江西にとっては与えられた道でもあり、またそれによってのみ生きがいを感じる」からこそ、戦後も一すじに労働運動に生きて来たし、生きて来ることもできた。アナーキストの中で、こうした運動を続けているのは、富士の福田武寿君と江西君だけのようだ。二人の行き方は同じではない。同じである必要はないのだ。も一人いたとしたら、その行き方も違うだろう。インテリや党の指導によってではなく、労働者が自分自身を解放するための闘争なのだから、その置かれた場所、時、状勢によって、また生きて来たその在り方、考え方によって反応の仕方も対処の仕方も一様ではない。その上集団行動となれば、それぞれの集団としての独自な行き方もある。

こうした中で江西君が近畿土木の争議について「われわれがいちばん危惧していた指導の意図のハネ上りが見られる」と書いていることである。指導は経験と思考によって他にアドバイスすることだが、どうかすると指導者としてエラクなったような気になり、どうしてよいか判断に迷う者の多い組合員に対して誤った指導を押しつけるハネ上りもある。運動のむつかしい所である。状勢や運動の限界を的確に判断しても、妥協的だとかダラ幹呼ばわりをされることもある。

今後とも江西君の健闘を祈る。

江西一三自伝（七〇〇円）

東京文京区後楽二ー七ー五シライビル

江西一三自伝刊行会

募集

もっとやる気をだそう。意欲的な作品を送って下さい。表紙、研究、情報、いづれも僕達がいま必要としているものだ。閉鎖的になってはならない。消沈すればするほど明日への思いをかきたてよう。表紙絵は折り曲げてあっても大丈夫。研究は内容が大事、巧拙でちゅう躇してはだめだ。一つでも多くの情報を！